

# Hypnotic Spy



Horikado Nagayasu

## 目次

1. 捏造の冤罪 .....	- 2 -
2. 淫虐の尋問 .....	- 18 -
3. 鬼畜の拷問 .....	- 42 -
4. 突然の処刑 .....	- 89 -
5. 任務の開始 .....	- 93 -
後書き .....	- 99 -

## 1. 捏造の冤罪

目が覚めると、見知らぬ部屋にいた。コンクリートが剥き出しの天井と壁。鈍く赤い陽が差し込む窓には鉄格子が嵌っていた。

鉄格子？！

ジェーン・Dは、驚いて身を起こした。鉄パイプを組み合わせたベッドに寝ていたことに気づいた。マットレスも敷かれていない、鉄パイプが簧の子状に張られただけのベッド。

狭い部屋の三方はコンクリートの壁。廊下に面した側は鉄格子で仕切られていた。向かいの牢に人影はない。

それよりも。自分が服を着ていないことに気がついて、困惑はさらに深まる。ブラジャーとパンティしか身に着けていなかった。

(なぜ、こんなことに……?)

疑問とほとんど同時に、ジェーンは答えを思い出していた。

彼女は、ある軍事情報誌と契約をしているフリーランスの記者だった。独裁政権下のこの国を取材に訪れて、伝手を頼って兵器工場の見学を許可されたのだ。写真撮影も（ガイドと称する監視者が認めた範囲では）OKだった。

当たり障りのない記事にはなるだろうし、今後のことを考えると、ある程度の<sup>f l a t t e r</sup>ヨイシヨも交えなければならないが、独占スクープには変わらない。賄賂にかかった金額を差し引いても、かなりのボーナスになる——はずだった。

工場のゲートで、金属検知器にひっかかった。所持品を検査されて、小さな（しかし複雑な形状の）部品がバッグの底から見つかった。

「わたしが盗ったのではありません」

閉じたバッグの中に勝手に転がり込むなんて考えられない。誰かが悪意を持って、彼女の間を衝いて忍ばせたのだろう。もちろん、そんな弁解は一蹴された。

ジェーンはその場で逮捕された。後ろ手錠を掛けられ目隠しをされて、おそらく正門の横に配備されていた装甲車に乗せられて――警察か軍隊の管轄下にある施設へ拉致されたのだ。

「身に覚えのないことです。会社に、いえ領事館に連絡してください」

彼女の抗議は、スタンガンの一撃で粉碎された。彼女は、そのまま気を失い……この部屋で意識を取り戻したのだった。

これから、自分はどうなるのか。力無くベッドの縁に腰掛けて、ジェーンは絶望に捉われる。

軍事機密を盗もうとしたスパイは死刑に処せられる。運が良ければ終身刑かもしれない

が、独裁者が気まぐれを起こせば重機関銃か、もっと残忍な方法で公開処刑にされるかもしれない。

ほんとうに彼女がスパイなら捕虜交換の形で解放されるかもしれないが、まったくの冤罪なのだから、その望みはない。著名ジャーナリストの失踪なら国際世論が黙っていないだろうが、著作もなく動画配信もしていない無名の彼女には、無縁の話だ。

冤罪だと訴えても無駄だろう。彼女は何者かによって罠に掛けられたのだから。

つまり……絶望。

けれど——と、彼女は一縷の希望にすがろうとした。

こんな無名のジャーナリストを冤罪に落して、なんの得があるのだろうか。考えられるのは、ある一派がこの事件を利用して何事か（どうせ権力争いだろう）を有利に導こうとしている——といったプロットだろうか。な

らば、その一派に敵対する勢力の介入もあり得ない展開ではない。

そのためにも……

ガチャリと鍵が開けられる金属音で、ジェーンの思考は断ち切られた。

警官とも軍人とも判別できない制服に身を固めた男たちが、牢に踏み込んできた。ひとりには小太りの中年で、顔も体型に似て丸っこい。あとの二人は二十代の精悍な青年。

青年のひとりがジェーンの喉輪をつかんで立ち上がらせ、後ろ手錠を掛けた。

ジェーンは逆らわなかった。腰に細い鎖を巻かれて、その端を股間に通されて前へ引き上げられても。むしろ、かすかな希望を見出したほどだった。

こういうふうに、容疑者が女であることを躡るような連中が相手であれば、尋問は性的な色彩を帯びるかもしれない。女としては屈辱だが……殴られたり生爪を剥がされたりす

るよりは、生き延びるチャンスが増えるのではないだろうか。

ジェーンはパンティの上から女淫に鎖を食い込ませた姿で牢から引き出され、尋問室に連行された。

腕と背中にあいだに背もたれをこじ入れる形で、後ろ手錠のまま椅子に座らされる。三人のうちの上官と思しき中年男が、デスクをはさんでジェーンと向かい合った。この男が取り調べの責任者なのだろう。男の腰掛けてある椅子のほうが、ジェーンの椅子よりも簡素だった。つまり——ジェーンの椅子にはごつい肘掛があり、いたるところに拘束用だろう革バンドなどが装備されているのだった。

股間の鎖が後ろに引き抜かれて、腰と背もたれをきつくつなぐ。二人の部下が左右からジェーンの手を割って、それぞれ椅子の脚に革バンドで固定した。

それから初めて、取調官が口を開いた。



「きさまの名前と所属を白状しろ」

台詞を棒読みしているような、抑揚のない口調だった。

「ジェーン・D。アーマー・アナリシス社と専属契約を結んでいるジャーナリストです」

「Dだと？ フルネームを言え」

「それは……」

ジェーンは絶句した。自分のファミリーネームを思い出せないのだ。D……ドーソン、ディーン……そうだ、ダグラスだった。突然の出来事に、軽い健忘症にでも陥っていたのだろうか。

「ダグラスです。ジェーン・ダグラス」

口にしてみると、たしかにそうだったと記憶がはっきりしてくる。

取調官は、部下が差し出した彼女のパスポートを開いて一瞥すると、それを部屋の隅に放り投げた。

「偽造パスポートの変名を尋ねているのでは

ない。本名を言え。おまえが所属している機関は、どこだ」

この男は真実を知らされず、ほんとうにわたしをスパイだと思っているのだろうか。

ジェーンは疑った。もし、そうなら……信じてもらえる可能性もゼロではないかもしれない。

「わたしは嘘をついていません。工場から部品を盗み出そうとしたのではありません。部品がわたしのバッグに紛れ込んでいたのは……なにかの手違いだと思います」

畏だと断定するとかえって心証を悪くするのではないかと、曖昧な言い方になった。

「領事館に照会してください。わたしの身分を証明してくれるでしょう」

取調官は首を横に振った。

「もちろん、そうだろうとも。おまえがスパイだと認めるはずもない。しかし、最重要機密を盗み出そうとしたという明白な事実だけ

でなく、おまえがスパイだという証拠は幾つもある。第一に、おまえの態度だ。裸も同然の姿だというのに、平然としている。なぜ、抗議しない？」

それは……この国における異分子（少数民族とか特定宗教の信者とか）に対する当局の扱いを知っていたからだ。拷問と陵辱。たとえ殺されなくても、五体満足で釈放される者は皆無に等しい。例外があるとすれば多数派民族の子を孕んだ女性くらいだろうか。下着だけでも残してもらえたのは、外国人への配慮だろうとさえ思っている。抗議なんかすれば、最後の砦まで奪われるかもしれない。

「わたしには理由はわかりませんが、あなたたちが必要だと考えたから、わたしの衣服を没収したのだと思います。どのような姿であろうと、それを理由に理不尽な取り扱いを受けるとは、まったく思っておりません。わたしは、この国の正義を信じています」

皮肉に聞こえなかっただろうか、ジェーンは反省した。どのみちそういった配慮など無駄だとは、すぐに思い知らされるのだが。

取調官は部下に向かって、現地語で何事かを命じた。命じられた若い男は、戸棚から小さなランチボックスのような物を取り出してデスクに置いた。蓋を開けて、注射器とアンプルを取り出す。

「おまえには、もっと素直になってもらわねばならんな」

注射器を持った男が背後にまわって、腕をねじ上げた。

「いやっ……やめてください」

得体の知れない薬品を注射されようとしているとわかってジェーンは身をもがいたが、もうひとりの男に二の腕をつかまれて、身動きできなくされた。

アルコールで消毒されて、腕の内側にチクッと痛みが走った。

「怯えることはない。幸せな気分になれる薬だ。副作用もない」

自白剤だろう。自分は隠し事なんかしていないのだから、恐れることはなにもない。むしろ、これで自分の言葉を信じてもらえる。ジェーンは、ひどく楽観的な気分になってきた。きっと、すぐにでも釈放してもらえる。

目の前に霧がかかったようになってきて、その霧が虹色に揺れ始めた。

「俺が誰だかわかるか？」

不意に声をかけられて、ジェーンは顔を上げた。優しそうな丸顔の男が、笑みを浮かべてこっちを見ていた。

「あなたは、わたしを取り調べている人です」

「ふむ。俺の質問に答えてくれるかね」

「はい」

「おまえの名前は？」

「ジェーン・ダグラス」

「年齢は？」

「25歳」

「身長と体重、それからスリーサイズは？」

「5フィート3インチ、132ポンド。上から35 / 24 / 35」

「どこの機関に所属しているのかな？」

「アーマー・アナリシス社と専属契約を結んでいます」

ふうと、取調官が溜め息をついた。

彼を失望させたようだと、ジェーンは申し訳なく思った。どう答えたら、喜んでもらえるのだろうか。

「では、質問を変えよう。おまえは、工場から部品を盗んだな？」

「盗んでいません」

「では、なぜ部品を持っていたのか？」

「わからないのです。保安係の人が調べるまで、自分でも気づいていませんでした」

「おまえは、あの部品が最新鋭ミサイルの重要部品だと知っていたのか？」

「知りませんでした」

「では、なぜ逮捕されたかわかるか？」

「わたしのバッグの中にあった部品が最新鋭ミサイルの重要部品だったからだと思います」

「知らないと言ったではないか」

「あなたが、さっき教えてくれました」

取調官が、また溜め息をついた。

「おまえの名前を教えてくれ？」

「ジェーン・ダグラス」

「歳は幾つかな？」

「25歳」

「身長と体重とスリーサイズも教えてくれるな」

同じ質問が微妙に言い回しを変えて繰り返されて、ジェーンは最初とまったく同じ言葉で答えた。重要部品だったことは知らないと答えたし、逮捕されたのは重要部品のせいだとも答えた。

そして、つぎは同じ質問が順序を変えて繰

り返され、ジェーンは最初と同じ言葉で答える。

「諸君ニハ超過勤務ヲシテモラワネバナランナ」

五回も同じ問答が続けられた後で、上官の中年男は唇をゆがめて二人の部下に声をかけた。ジェーンに聞かせる必要はないので現地語だ。

「何度答エテモ、一言一句変ワラヌ返答ダ。ツマリ、コノ女ハすぱいダ」

部下のひとりが、怪訝そうな顔を作った。この男は階級章が赤筋に星ひとつだった。軍隊の一般的な階級名でいえば少尉に相当する。

「菓ノ効キ方デ言葉ハ微妙ニカワッテクルノガフツウダ。コチラモ表現ヲ変エテイル。マッタク同ジ返答ヲスルノハ、ナンラカノぶろっく処置ヲ施サレテイルカラダ」

「デハ、拷問ニ掛ケマスカ？」

星二つの部下が、上官におもねるように尋



ねる。こちらは中尉。

ジェーンは、ある程度は現地語を解する。しかし今は、付け焼刃を活かそうという意思ももなく、とげとげしいアクセントは耳障りなだけだった。

「性急スギルノガ貴様ノ欠点ダナ。マズハ、コノ者ヲ女性トシテ丁重ニ扱ッテヤロウデハナイカ」

「ハイッ」

二つ星が喜色満面に応える。

「デハ、何名カ有志ヲ募ッテオキマシヨウカ」

「ソノ必要ハナイ」

取調官は即座に上申を却下した。この男の階級章は、赤筋に大きな星がひとつ。少佐に相当する。三人ともに士官であるという事実だけでも、事件が重大視されているとわかる。

しかしそれにしては、少佐の表情に緊張の色は薄い。

「タダシ、所定ノ器具ノ動作ヲ確認シテ、交

換用ノ電池ヲ用意シテオケ」

「タダチニ、取り掛カリマス」

青年はわざとらしく四角四面な敬礼をして、戸棚に向かった。

「あめりか製模造男根、異状無シ。ヤパン製三点刺激器具、作動良シ……」

国家機密の防衛よりも淫欲を優先されるつもりなのか。それとも、女性には色責めが最も有効と考えているのか。いずれにしても、どんな罪で捕まろうとも女性は必ずといっていいほど性的虐待を受けると噂されている国にふさわしい『尋問』が始まろうとしていた。

取調官が立ち上がった。

「菓ガ切レルマデ、アト一時間ハカカル。食事ヲ済マセテオコウデハナイカ。俺ガ奢ッテヤルヨ」

「ハイッ、アリガトウゴザイマス」

幸せそうに目を煙らせているジェーンを椅子に拘束したまま、三人は尋問室を出て行っ

た。

## 2. 淫虐の尋問

ジェーンの意識は次第に薄れていき——きついアンモニア臭で正気に還った。すでに自白剤の効果はなくなっているのだろう。ジェーンの視界に虹色の霧は掛かっていない。

二つ星の青年が、またジェーンの腕に注射をする。さらに。

「やめてください！」

パンティに手を掛けられて、ジェーンが腰を引こうとした。が、鎖とベルトで拘束されているので、青年の手から逃れることなど不可能だった。

ビリビリとパンティが引き裂かれて、髪の毛と同じ明るい茶色の淫毛が男どもの目に曝された。

二つ星が別の小さな注射器を持って、開脚されたジェーンの足元に膝を突いた。ぱっくりと開いた淫裂を指でくじって、頂点の肉芽をほじくり出す。

「なにをやるの？ やめて……変なところをさわらないで！」

悲鳴を交えた抗議。しかし、青年の指から逃げようとする動きは、クリトリスに注射針をあてがわれて、ぴたりと止まった。激痛の予感に全身が小刻みに震えだす。

「もっともっと幸せになれる注射だ。緊張する必要はない」

取調官の言葉が終わらないうちに、クリトリスの先端に細い注射針が突き立てられた。

「ぎびい`い`い`い`……っ！」

鎖の束縛に逆らって腰が宙に跳ね、そこで凍りついた。

ピストンがゆっくりと押されて1ミリリットルの薬品が注入されていくにつれて、肉芽

がわずかに膨れる。

「はあ、はあ、はあ……」

激痛は去って、ジェーンは荒い息を吐きながら……クリトリスがじんじん疼くのを感している。

次第に、疼きが熱を帯びてくる。その奥にもどかしいような感覚がわだかまる。

ふたたび視界に霧が掛かってくるが……虹色ではなく淡いピンク色だった。

「薬が効いてきたようだな。尋問を開始しよう」

一つ星の青年がデスクに上がって、天井に埋め込まれているフックにチェンブロック（手動巻き揚げ装置）を吊るした。二つ星がジェーンの手錠を前に掛け替えた。チェンブロックから太い鎖で垂れているフックに手錠を引っ掛けて、ジェーンを椅子の拘束から解放した。

チャリチャリチャリチャリ……操作用の細

いエンドレスチェーンが手繰られると、フックがじわじわと吊り上げられていく。ジェーンは腕を引っ張られて、否応なく立たされる。

さらに――左右の足首に別々の手錠が嵌められる。

「いやあっ……やめてください！」

左右に脚を引っ張られて、麻薬と催淫薬とで朦朧としているジェーンも、渾身の力でもがいて恥辱から逃れようとする。が、若い頑健な男二人の力にかなうはずもなく、首の後ろにあてがわれた長い棒の両端に足首の手錠をつながれてしまった。正面から見れば、股間を無防備に曝け出すしかないV字開脚を垂直に立てた形。

取調官がジェーンの正面に立って、裸身に残された最後の布――ブラジャーを乱暴に引き千切った。

「やめてください。もう、辱しめないでください。自白剤を使って、わたしの言葉に嘘は

ないとわかったはずです」

取調官は訴えを無視して、『やぱん製三点刺激器具』すなわち三連ローターを取り上げて二つ星の青年に手渡した。デスクの上には、ほかにもさまざまな器具が並べられている。

「まずは、じっくりと焦らしてやれ」

二つ星がジェーンの正面にしゃがみ込んだ。右手にリモコンボックスを持ち、左手にいちばん太くて長いローターを握っている。小さな二つのローターは一つ星に担当させる。

一つ星はジェーンの背後に立って、両手にひとつずつローターを持つ。後ろから抱きすくめるようにして、ローターをジェーンの乳首に当てた。

ヴヴヴヴヴ……

「いやです……やめて……くううう……んん」

もしもほんとうにやめたら、絶対に女から恨まれる。童貞でさえもそう確信するくらい

に、ジェーンの訴えは甘く鼻に抜けている。

二つ星が長いローターの先端を、触れるか触れないかという微妙なタッチでクリトリスに沿わせた。

ヴヴヴヴヴ……

「ひゃああああっ……いや、いやああ！」

ジェーンは空中で腰を揺すった。しかしローターは執拗にクリトリスを追いかける。

「ところで、あなたのお名前はなんでしたかな？」

取調官が、わざと丁重に尋ねる。

「ジェーン・ダグラス……あああああ」

ぴたりと真顔になって名前を答え、ひと呼吸すると快感に溺れ始める。いや、苦悶の表情は快感と戦っているのかもしれないが——人間の指とは比べものにならない刺激には、抗えようはずもない。

「おまえのバッグに機密部品が隠されていたのは何故だ？」



一転して厳しい口調で詰問されても。

「わからないのです。保安係の人が調べるまで、自分でも気づいていませんでした。……  
ああああ、やだ……やめてくださいいいいい」

ふたたび正気づいて答え、一瞬の後にはまた悶え始めるジェーン。

「ナルホド……」

一つ星がつぶやいた。ジェーンの応答ぶりが尋常ではないと、彼にも納得できたのだろう。

二つ星が取調官を振り返った。尋問を続けますかと、目顔で問うている。

「三点刺激器具で追い上げてやれ。休ませるな。絶頂に達してからが本番だ」

ぎくっとジェーンの顔が強張ったのは、取調官の言葉を正しく理解した証拠だった。

「いやよ……もう、赦して。わたし、ほんとうのことしか言ってない。スパイなんかじゃない！」

二つ星はリモコンのパワーを最大まで上げることで、ジェーンの哀訴に応えた。

「うああああ……いやあつ……あああ、あああああ……」

ジェーンの悲鳴はますます艶を帯びていき、ついには絶唱にまで高まった。

「いやあああああ！ やめてやめてやめて……逝く、逝っちゃううううう！」

開脚マングリ返しの姿勢で垂直に吊られているジェーンの裸身が、手錠と鎖の許す範囲でそり返って、十秒ほども硬直してから——ぐたりと弛緩した。

取調官はデスクの上から小さなプラスチック製のカップを取り上げた。口のまわりには気密を保つためのゴムリングが嵌められて、内部にはスプリング状の電極が埋め込まれている。カップの側面には着脱式のゴムチューブがつながれている。

「真空ポンプを忘れてるぞ」

二つ星があたふたと戸棚から小さな直方体の器具を取り出して、ジェーンの真下に置いた。

取調官は透明なカップをジェーンの乳首に押しつけて、真空ポンプのスイッチを入れる。

トルルルル……カップが真空になって、すでに勃起していた乳首がブドウの粒ほどにも膨らんで、内部の電極に押し戻される。カップからゴムチューブが外されて、電極に電線がつながれた。電線は、デスクの上に置かれてある電源ボックスから伸びている。

「あああ……なにを？」

呂律のまわらない舌で、ジェーンがつぶやく。

「三点刺激器具では、せいぜい遊覧飛行といったところだ。今度は成層圏、いや宇宙の果てまで打ち上げてやる」

意味がわからずに、とろんとした目で、乳首に装着されたカップを眺めるジェーン。

カップが吸い付いたのは双つの乳首だけではない。淫毛を掻き分けて、クリトリスにも三つ目のカップがかぶせられた。

「ここは、すこし空気が漏れるな。真空ポンプを付けっぱなしにしておこう」

そのせいもあるのだろう。クリトリスはカップと同じ大きさまで膨れあがった。

「では、第一段ロケット点火」

電源ボックスには前世紀の遺物さながらに、幾種類ものスイッチとダイヤルが取り付けられている。取調官は左上に並んだ三個のトグルスイッチを跳ね上げた。そして、その下にあるダイヤルを右へまわす。

と同時に、ジェーンの白い裸身がぴくぴくとリズムカルに小さな痙攣を始めた。

「うああああ、ああああああ……」

敏感な三点への低周波刺激に、ジェーンがのけぞる。

「二人とも、助推器でこの牝豚を離昇させろ」

ミサイルに関する事件にひっかけた洒落のつもりなのだろう。しかし、こういう責めは二人とも初めてではない。意味を取り違えることもなく、それぞれに巨大模造男根と振動伸縮器具を手を取った。模造男根は四角い台座と一体になっており、台座には十字形にハンドルが取り付けられている。

すでに濡れそぼって妖しく続っている淫唇を、本物ならギネス記録を軽く更新するだろう巨大な模造男根が貫く。

「ぎゃはわああああ……！」

ジェーンが、肉食獣の咆哮にも似た悲鳴をあげた。がくんがくんと太腿を痙攣させる。

模造男根よりひとまわり小さな器具は肛門を抉った。

「ぎいいいっ……痛い！」

前からまわりこんだ蜜で多少は潤滑されていたとはいえ、そこで男性器を受け挿れるような性癖に染まっていないジェーンは、純粹

に苦痛を叫んだ——のだが。

ウィンウィンウィン……器具が回転と伸縮を始めると、苦悶の表情が淫虐に蕩けていく。

模造男根は膣奥に突き当たって、なおも半分は外に飛び出ている。二つ星が台座のハンドルを両手で握って——手元のスイッチを入れた。

ズドドドドドド……削岩機のような音を立てて、台座が激しく震えだした。二つ星は台座に腰をあてがって、ぐいっと突き込んで半分ほど引き戻す。

「ガヴァワアアア……ア`ア`ア`……！」

二つ星の男が怯んで後じさったほどの雌叫めたけびがジェーンの喉から迸った。

「ヴァア`ア`……イ`ヤ`ア`……死`ぬ`う`！  
死んじゃう！ 赦してえええええ！」

乳首とクリトリスへの低周波刺激は、オナニーすらしたことのない処女さえもアクメに追い込む威力がある。性経験がじゅうぶんに

あるジェーンには、極太ディルドも許容範囲だった。肛門に膣用のバイブを挿入されるのは苦痛だろうが――麻薬の快樂に溺れさせられたうえに催淫薬まで投与されていては、苦痛も悦虐に転化する。加えて、強烈な振動。ジェーンは主要な性感帯のすべてに、これまでに体験したことのない過激な快感を注ぎ込まれて――狂乱していた。

「あなたの所属している組織の名前を教えてくださいませんか？」

取調官が耳元に睦言のようにささやく。

「社員ではありませんが、アーマー・アナリス社と専属契約を結んでいます」

ジェーンが、その瞬間だけは棒読みで答えを返す。

取調官がデスクに置かれた電源ボックスに手をかける。

「止メロ」

短い命令と同時にトグルスイッチを倒した。

ほとんど同時に、二穴からも責め具が引き抜かれた。

「あああつ……いやあ！ やめないで！ もっと、もっと逝かせてえ！」

ジェーンが甲高い声で叫んだ。

「ほんとうのことを言えば、続けてやる。おまえの名前を教えろ」

「ジェーン・ダグラス」

棒読みで答えて――すすり泣き始めた。

「ほんとうです。わたしは……ジェーン・ダグラスです。本名です。記事の署名も……この名前です」

途切れ途切れに訴える声には、真実を信じてもらえない悲しさがあふれていた。

しかし、それに騙されるような取調官ではない。彼女の情動は、ブロックされた真実の上に書き込まれた偽の記憶に基づくものだと、固く信じている。

「ヤムヲ得ンナ。ツギハ拷問ニ掛ケルトシテ、



今日ノトコロハ牝豚ヲタツプリ愉シマセテヤ  
ロウ。二人トモゴ苦勞ダッタ。ココカラ先ハ  
超過勤務手当ガツカナイゾ」

取調官は真空ポンプのスイッチを切り、ジ  
ェーンの身体からカップを引き剥がした。二  
人の青年は勤務を離れる気配も見せず、器具  
の後片付けをする。

しかし。一つ星がジェーンを下ろそうとす  
ると、取調官が制止した。

「ソノママダ。コノ形ノホウガ、イロイロト  
愉シメル。イヤ……モウ少シダケ吊り上ゲテ  
クレ」

取調官は下着もろともズボンを引き下ろし  
た。すでに股間は臨戦態勢を整えている。ジ  
ェーンの正面に立って、上体を反らし気味に  
して怒張を垂直に立てた。

「ユックリト下ロシテクレ」

ちやり……ちやり……ジェーンの股間が、  
怒張に向かって下ろされていく。

取調官は立ち位置を微修正して、亀頭を淫裂に割り込ませた。

「20cmばかり一気に下ゲロ」

ちゃりり……女淫は根元まで怒張を突き立てられた。

「あああっ……」

ジェーンは半開きの口から涎を垂らしながら、喜悦に呻いた。模造男根の半分ほどの大きさであっても、すべての快感刺激を奪われてしまった今では——飢餓の前に投げ与えられた一切れのパンほどにも嬉しかったのだ。

「貴様ハ後口ヲ可愛ガッテヤレ」

二つ星もズボンを下ろして、ジェーンの背後に取りついた。膝を曲げて腰を沈め、伸び上がるようにして一気に肛門を貫く。

「うああ、いいっ……」

ジェーンは、もどかし気に腰を揺すった。宙吊りにされているのだから、反動で上体は逆に振れる。

「ホオ、コレハ面白イ」

取調官と二つ星は協力し合って、ジェーンの肩を支えた。

「俺たちは動かない。おまえが好きなように動いてみろ」

ジェーンはとろんとした眼差しで目の前の顔を眺めて……言葉の意味を理解したらしく、激しく腰を前後に揺すぶり始めた。肩を支点にするのは関節や筋肉の動きを考えれば不自然な体勢だったが、それでもジェーンは前よりも激しく腰を前後に揺すった。

「うああ……いい、いいい。逝きたい……逝かせて……」

うわ言は次第に大きく、そして艶やかになっていく。

「いいい……逝けそう……あああっああん……」

しかし、性感帯への低周波刺激と極太の模造男根に比べれば、振動も回転もしない生身

の肉棒では物足りないのだろう。

「うあああっ……逝く、逝くうううう！」

絶頂を訴える悲鳴は可憐で、野獣の咆哮にはまったく届かなかった。

たとえ小さくてもひとつの峰に登り詰めた余韻に浸ろうとするジェーンにはお構いなしに、二人が荒腰を使い始めた。

「あ……やめて……休ませて」

しかし実際に二人が果ててジェーンから身を離すと、食欲に快感を追い求める。

「待って……やだ、もっとお！」

「もちろんだ。まだまだ愉しませてやるとも」

取調官は一つ星に、床に仰臥するように命じた。

「ふだんのSEXでは体験できない体位の素晴らしさを教えてやろう」

怒張を（苦勞して手で押し下げて）垂直に保っている腰に向かって、ジェーンの身体がゆっくりと下ろされていく。

「こんな……羞ずかしい」

肉棒一本の刺激はものの数にはいらいとでもいうように、ジェーンはすこし理性を取り戻して、それだけに恥辱に眉根を寄せていたのだが、男が怒張から手を放すと、びくっと腰を震わせた。百八十度まで反り返ろうとする怒張が膣壁を強くこすったのだ。

「ああ……んんん」

喘ぎ声は慎ましやかなものだったが。

取調官と二つ星がジェーンを挟んで立った。肩に手を掛けて右へ回す。

「え……？ あ、ああ……ん」

男の怒張を軸にして、ジェーンはゆっくりと独楽のように回される。亀頭がごりごりと膣壁を刺激する。

「な、なに……これ？」

目まいなのか歓喜なのか、ジェーンは頭をのけぞらせて……未知の刺激に官能をゆだねる。

裸身を吊っている太い鎖がよじれて、次第にジェーンの身体が吊り上がっていく。

「やだ……抜けちゃう」

亀頭が半ばまで露出したところで、回転は止まった。

「女ニ負ケルナヨ」

取調官が揶揄か激励か、仰臥してジェーンを貫いている青年に声をかけてから。

「イー、エイッ！」

掛け声とともに、二人して反対方向へ裸身をぶん回した。

ガチャチャチャチャ……

鎖のよじれが戻る金属音と共に、裸身が回転する。怒張が再び女芯に食い込んでいく。

「ぎびいゝいっ……うあああっ……」

ジェーンが絶叫した。

「うああああああああああ……」

息の続く限り叫び続ける。三点低周波刺激プラス二穴責めほどではないにしても、ふつ

うではあり得ないエクスタシーを味わっているのは明白だった。

鎖のよじれが戻りきっても、ジェーンの裸身は回り続ける。取調官と二つ星が回転に勢いをつける。意識的に乳房をわしづかみにしたり、あるいは淫毛を引っ張って、ついでにブチブチと引っこ抜いたり。ジェーンを貫いて『回転軸』になっている男も、怒張に手を添えて指で女芯をくじっている。そういったあれこれの弄虐さえも、すでにエクスタシーの雲に包まれているジェーンには、愛撫でしかないのかもしれない。

「ぎひいいっ……もう、もう……やめて！」

はっきりと恍惚の表情を浮かべているのだから、もっと激しくしてほしいと男たちの耳に聞こえても不思議はない。

しかし。再び抜去寸前まで吊り上げられたジェーンの裸身が、反対方向にまわり始めて——その尻が仰臥する男の下腹部に触れた瞬

間、男のほうは快樂に耐えきれずに暴発させてしまった。

男はジェーンから手を放して床に投げ出し、申し訳なさそうに取調官を見上げた。

「仕方ガナイ。今日ハコレマデニスルカ」

取調官がデスクに戻って腰を下ろした。ひと仕事をしたとばかりに、煙草をくゆらせる。二人の部下がジェーンをチェンブロックから下ろす。

床に突っ伏しているジェーンに、この部屋へ連行したときと同じように後ろ手錠が掛けられ、腰に細い鎖が巻き付けられた。

「いつまでも寝ているな。立て」

脇腹を蹴られても、ジェーンは身をよじるだけで起き上がろうとはしない。鼻先にきついアンモニア臭のするスプレーを吹き掛けられても、苦しそうに咳き込むだけ。快樂の余韻を彷徨っているのではなく、まだ麻薬が効いているのだろう。



「引キズツテ行ケ」

二人の青年が、うつ伏せになっているジェーンの足を片方ずつ持って、尋問室から引きずり出した。

「痛い……やめて。立ちます。立つから……止めて……きひいい……」

ジェーンの訴えには耳を貸さず、そのまま廊下も引きずって独房まで連れ戻した。ジェーンの上半身、ことに下乳はすり傷だらけになったが、はたしてどれだけ苦痛を感じていたのかは怪しい。

ジェーンは鉄パイプのベッドにあお向けにされて、四肢をごつい鉄枷で四隅の脚につながれた。二の腕も太腿も腰も胸も、革ベルトでベッドの棧に縛りつけられた。

一つ星が中年の男を連れてきた。同じように制服を着て、階級章は大尉。腕に大きな赤十字の徽章が縫い付けられている。

医務官は雑にジェーンを診察して、肩をす

くめた。

「トクニ手当ノ必要ハナイデショウ。少佐殿ニシテハ珍シイコトデスナ」

「明後日ハ、貴官ニ腕ヲ揮ッテモラウダロウガネ。感覚遮断処置ダケハ、シテオイテモラオウカ」

医務官は、持ってきた大きな鞆から幾つもの小道具を取り出した。ジェーンの耳に粘土を詰め、口には太い管が突出したボールギャグを押し込んだ。そのうえで、鼻の部分に小さな穴が開いているだけの全頭マスクをかぶせる。その穴からビニールチューブが挿入されて、真空ポンプに似た器械につながれた。その横に本体よりも大きな蓄電池が据えられたのは、独房に電源ソケットなど備わっていないからだ。

医務官がスイッチを入れると、ビニールチューブを通してジェーンの肺に新鮮な空気が間欠的に送られ始めた。

さらに——喉と左胸に電極が貼り付けられ、指サックのようなセンサーが両手に取り付けられた。病院で見かけるパルスオキシセンサーと違って、本人が他の指を使っても取りはずせそうにない。これは小さな箱につながれた。箱の一面がスピーカーになっているのは、通信機能がないので大音量の警報を鳴らすためだろう。常に国際通貨の欠乏に苦しめられ、後見国からの援助も途絶えがちなこの国では、古色蒼然とした中古品を揃えるのが精一杯なのだ。

時代遅れの生命保障だけを与えられて——ジェーンは独房に放置された。